

ケアマネだから できること

19

～専門職の質をあげるとは？～

木村晃子

居宅介護支援事業所 あったかプランとうべつ

介護支援専門員の質は低いのか？

私の業界、高齢者支援や介護保険制度を扱う領域ですが、耳にたこができるほど言われているのが、「介護支援専門員の質の向上」ということです。このことが言われてずいぶんたちますが、それほどにも、介護支援専門員（ケアマネジャー）の質は低いものなのか、と残念に感じます。

私自身は日々精進の中に歩んでいるつもりですし、周りを見ても研修に参加し、専門書を片手に勉強する介護支援専門員の姿も目にします。一方で、介護支援専門員の各種研修など、後進育成の場面に微力ながら携わると、残念なことに、何か大切なことが置き去りにされたまま、日々の業務に忙殺され、実地指導対策のための「上手なケアプラン」や「書

類の作り方」に興味を示す人も散見されるものです。仕事をしていても、与えられた役割のそれ以下にはならないものの、決してそれ以上の仕事はしないというスタンスの人が多くなっていることも感じます。それほどに、介護支援専門員の業務量の多さは否めないのも事実です。

専門職の質の向上のために必要なことは何でしょうか。研修や日々の仕事の積み重ねによって、どんなに知識や技術が向上したとしても、それが質の向上にはつながっていない、「そもそも何をもって質の向上とみなされるのか」というところに非常に関心を持ちました。客観的に見て「仕事のできる、質の良い専門職」にあるものとは何なのか、改めて考えてみたいと思いました。

質とは何か？

辞書によると「質」とは、成り立つもと、実体、たち、もちまえ、よしあしから見た性質、備えている性格、能力、などと説明されています。「介護支援専門員の質の向上」という場合には、性質や能力といったところを指すのでしょうか。性質や能力を向上させるためには、どうすれば良いのでしょうか。

私は、専門職の「質」とは、その果たすべき役割に与えられている職業的価値にあると考えます。つまり職業を遂行する上での「倫理」ではないかと考えているのです。知識や技術の前に、「何故、その知識や技術が必要なのか。」ということを確認しておかなければ、知識や技術を身に着けても、それを生かす場面を誤るのではないかと思います。

東京大学の清水哲郎先生（臨床倫理プロジェクト）は、倫理的な振る舞いについての行為分析を次のように説明しています。

状況に向かう姿勢+状況把握 →行動

つまり、周囲の迷惑にならないようにしようという（状況に向かう姿勢）が、電車の中の携帯電話は迷惑と判断し（状況把握）、結果として、電車の中では携帯電話はかけないという結果（行動）につながっているということ。（*臨床倫理プロジェクト資料引用）

専門職として、どのように在ろうとしたか、という姿勢があって、状況判断する際に必要なのが、知識や理論であり、その結果とる手段（行動）には、技術が必要になってくると

考えるとじっくりいきます。最終的にとる行動が、支援対象者の利益に寄与できるかどうかは、知識や技術、といった状況把握や行動につながるのですが、そもそも、「専門職としてどのように在ろうとしたか。」というその姿勢こそが、知識や技術を支える、専門職として力を発揮するために重要な骨組みだと思えます。

職業における倫理とは何でしょう。介護支援専門員においても、倫理綱領というものがあります。社会福祉士についても然りです。まずは、倫理綱領を知った上で職務を遂行するわけです。果たして、質が低いように言われて続けている、介護支援専門員は、どれだけこの倫理を意識しているのでしょうか。介護支援専門員だけではありません。全ての専門職についても言えることです。

強い使命感を持った専門職は、強く倫理を意識しているかもしれません。倫理を意識できるかどうか、そこが専門職としての「質のよしあしの分かれ目」かもしれません。

職業選択の動機

対人援助の専門職として、その職業選択の動機にはどのようなものがあるのでしょうか。私は現在ケアマネジャー（介護支援専門員）ですが、その土台となった職業は准看護師でした。准看護師になる土台は、障害者施設の介護員でした。介護員になった動機は、頭の片隅に「福祉の仕事」というイメージが

ありながら、高校卒業した当時通っていた予備校の授業に自分の未来が感じられず、予備校を中退し、仕事をしようと思った矢先に、求人広告でみつけたのが介護員という仕事でした。この時の採用試験に落ちたら、役者になるために上京しようと密かに心に決めていたのですが、結果として、介護員として採用されたのですから、私には最初から役者の道はなかったのでしょうか。介護員の仕事は楽しかったのですが、自分のしている仕事の根拠がわからないことの疑問を感じていました。そんな折に父親が癌の宣告をされ、余命いくばくもないようなことを父と母が言っていたことにも刺激を受け、働きながら看護学校に通える道があることを教えてもらい、看護学校への進学を果たしました。看護の道を歩むことになったのは、父親への思いがあったのでしょうか。その後、時代は、医療や看護から、介護と移っていくなかで、介護支援専門員(ケアマネジャー)という職業が日本の介護保険制度に位置付けられました。自宅で生活をする人の、その人らしさと暮らしの継続の実現を支援するケアマネジャーという職業に非常に大きな魅力を感じました。看護の仕事の経験の上、介護支援専門員の資格を取得し、すぐにケアマネジャーとしての仕事を始めました。

介護支援専門員がどのような社会的使命をもっているのか、当時はよくわかっていませんでした。けれども、自宅で自分らしく生き

ていく高齢者を支援する、ということは無言のうちに自分のケアマネジャーとしての在り方を形作っていたと思います。自分の意のままに生きていく。これは人間として最も尊いことだと感じます。そして、それは同時に私自身もっとも苦手なことだったかもしれません。自分が苦手なことだからこそ、自分の意のままに生きていくための支援がしたかったのかもしれない。

対人援助の専門職における職業選択と家族

対人援助の専門職の職業選択の動機には、少なからず自身の生活体験や経験が影響しているのではないのでしょうか。その職業を選択したきっかけになるエピソード、物語が誰にでもあるように思います。その動機こそ、専門職の使命感を喚起させたり、逆に、触れたくないものとして、自分の内面とは向き合わずに専門性を果たしていこうとする人もいるかもしれません。それが、それぞれの専門職としての「あり方」を表しているのではないのでしょうか。どちらが良いというものではなく、どちらも「自己と向き合う」必要があると思います。自分の思いが強すぎると、援助の場面において感情の逆転移を起こしてしまうかもしれません。自分の思いに無頓着だと、援助対象者の思いにも無頓着になってしまう恐れがあります。自分の価値観に気が付いていることは、援助者として、「どのようにあろうとしたか。」という姿勢そのものです。

私たちが生きていく上で身に着けていく価

価値観は、育ちの家族の中の影響が大きいのではないのでしょうか。家族の中で当たり前継承される価値観や、継承したくない価値観。それらが、自分の行動の動機になっていることは多々あるでしょう。自分の考え方、価値観はどのようなものか、自己覚知しておくことは、援助対象者を唯一無二の「個」として尊重するためには必要なことだと思います。

専門職に求められる役割をどのように果たしていこうとしているのか、自分自身の在り方を見つけるとき、原家族について今一度振り返ることで発見することもあるのではないのでしょうか。

転機

職業選択にさほどの動機、動機を呼び起こすエピソードなど思い当たらない、という場合もあるでしょう。深く考えずに、専門職として仕事を遂行していくなかで、仕事上の悩みがぶつかることがあるかもしれません。その時に、専門職としての在り方を考えるきっかけになるかもしれません。

対人援助の仕事をしていると、いつも対象者を「援助すること」ばかりに意識が向き、自分の立ち位置を見誤ることさえあるかもしれません。どんなに苦しい悩みや困難な状況を抱えた人にでも、問題を解決する力は備わっているのです。そして、援助者である自分自身も、生活者の一人として悩みや問題を抱えながら生きている一人の人間であることの自覚。ここに、専門職としての「どうありた

いか。どうあろうとしたか。」という姿勢が含まれていくのでしょうか。

専門職として、質の向上のために必要なことは、知識や技術を適切に行動できる、「あり方」そのものを自覚すること、だと考えます。

自分自身がどうありたいか。その自分自身を使った、専門職として、どうありたいか、どうあることが社会的使命なのか、原点はそこではないかと思います。

どうありたいか、どうあろうとしたか、は外見からはなかなか理解や評価しがたいところです。

それでも、尚、どうあろうとしたか・・・

*文中では、介護支援専門員とケアマネジャーを使い分けています。筆者のとらえの枠組みで、介護保険制度の中の介護支援専門員と、制度にとらわれずに、ケアマネジメントを実践する場合のケアマネジャーという使い分けをしてみました。